

# 『とりかへばや』 男装の女君の「はなばなと」について

樋口育代

## 序

『とりかへばや』の題名はその名の通り、男らしい性格をもった娘と、女らしい性格をもった息子、その二人の父が、二人を「とりかえたい」という嘆きから付けられている。九百年も昔に、男女の入れ替えという題材を扱った、その内容の面白さに興味が魅かれた。

古くには、『とりかへばや』には二種類あったと思われる。散逸した『古とりかへばや』と、その改作本で現存する『とりかへばや』である。本稿では、この『とりかへばや』について考察していきたい。

『とりかへばや』は現存するものの、作者及び成立年については確定するに至っていない。作者が男性か女性かということ

についても確定されていないが、友久武文・西本寮子両氏は著書『とりかへばや』の解題でこう述べられている。

異装する兄妹に注がれている視線が、男装の女君の方にびつたり寄り添っており、物語文学が一貫して見つめ続けてきた女の心を克明に描こうとしていること、作者は『源氏物語』についてはいうまでもなく、とりわけ『夜の寝覚』に通じていると思われることなどから、女性を想定することに無理はなからう。(注)

成立年については、『無名草子』に評があることなどから、正治二年(一一二〇年)以前、十二世紀最末期のごく短い間であらうと推定されている。

今回、「とりかへばや」を調べる上で私が注目したのは、その美的語彙である。一口に美的語彙と言っても、王朝文学の美を表現する語彙は多種多様にあり、加えてその対象となる人物の外見だけでなく内面や性別、家柄、血筋などによってその美を表していることから、物語中に異装する兄妹の美を表す美的語彙が何らかの変化をするのではないだろうか考察してみたい。特に男装の女君を形容する「はなばなと」に注目し、論を進めたい。

—

はじめに「とりかへばや」巻一の美的語彙及びその対象人物・対象物を調べ、主要人物の異装する男君・女君に多く使用されているもの、その中でも物語中における使用頻度の多いものを取り出してみた。そして、それが物語全体にどの程度の数類出するか、誰にどのような語が使用されているか表にまとめてみた。その表が表①である。

表①をみると、男装の女君に多く使用されている美的語彙「うつくし・うつくしげなり」「にははし・にはひ・匂ふ・匂ひやかなり」「はなばなと」が女装の男君には少ししか使用され

ていないこと、対して、女装の男君に多く使用されている美的語彙「あてなり・あてはかなり・あてやかなり」「なまめかし・なまめかしさ・なまめきさま・なまめく」が男装の女君には少ししか使われていないことがうかがえる。はっきりと対照的に数にあらわれている事は興味深い。また、男装の女君に使用されている美的語彙の数が、他の人物に使用されているものよりも突出して多いこともうかがえよう。これは、作者が男装の女君の美を、物語中に多く表現していることをしめすものと考えられ、また、そのことが「とりかへばや」の主人公が女君であろうことをしめしていると言える。

次に、「とりかへばや」における異装の兄妹の美的語彙が物語の進行とともに何らかの変化をするだろうか。それを調査するために、物語の変遷のなかで兄妹にそれぞれ多く使用された美的語彙(表①でピックアップしたもの)がその物語中どこに使用されているかを表にしてみた。その表が表②である。この表をみると、兄妹が異装している間も語彙の使用頻度は減ることなく、一貫して物語に使用されていることがうかがえる。

なぜ作者は、男装の女君、女装の男君が本来の姿に戻っても、一貫して同じ表現を使用したのだろうか、次に考察していきたい。

表①

総 数	人物・対象物																美的語彙						
	風情を感じさせる	花	召物	宴	男君と女君	女君が想像した女性	女君と四の君の夫婦	四の君の歌	男君と麗景殿女御の娘	男君の春宮の息子	帝の息子	女君と中将の息子	次女	四の君と中将の長女	吉野宮	春宮		中君	大君	四の君	宰相中将	女装の男君	男装の女君
33	0	0	0	0	0	1	1	1	0	0	0	0	0	0	2	2	0	6	8	2	8	2	あてなり あてはかなり あてやかなり
53	0	0	0	0	1	0	0	0	2	2	1	7	1	3	0	0	7	1	2	0	1	25	うつくし うつくしげなり
32	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	5	4	8	13	0	なまめかし なまめかしさ なまめきさま なまめく
38	1	3	2	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	2	0	4	24	にはほし にはひ にはひやかなり
16	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	15	はなばたと

〈注三〉

表②

物語における出来事	美的語彙				
	男装の女君	女装の男君			
女君・男君の誕生 共に、女君は若君、男君は姫君と呼ばれ成長 女君(男装)の元服、男君(女装)の裳着 女君(男装)、四の君と結婚 四の君、宰相中将与密通・妊娠 女君(男装)、宰相中将与契る 女君(男装)の妊娠 女君(男装)宇治に身を隠し、女姿に戻る。 男君(女装)、女君の捜索を決意、男姿に戻る。 女君、男児を出産 女君と男君、宇治で再会 女君、男児を残して吉野へ 女君と男君、掃蕩。立場を入れ替える。 女君、帝と契る。妊娠、出産。	うつくしげ うつくし 3 3 1 1 1 1 3 2 3 1 4 3	にほふ にほひ にはひ にはは にははし にははし 2 1 3 2 1 2 2 3 5 2 1	はなばなと 1 1 1 2 1 2 4 2 1	あてはかり あてはか あてはか 1 1 1 3 1 1	なまめかし なまめかし なまめかし なまめかし なまめく 4 2 1 3 1 2

〔注四〕

まずはじめに、男君・女君の美を最初に作者が表現した本文を記す。

大方は、ただ同じものと見ゆる御かたちの、若君は、あてにかをりけだかく、なまめかしき方添ひて見え給ひ、姫君は、はなばなと誇りに、見ても飽く世なく、あたりにもこぼれる愛嬌など、今より似るものなくものし給ひける。

(訳) 一見したところ、よほど気をつけて見なければただ同じとしか見えないお顔たちではあるが、若君の方は、上品で匂い立つような気高さがある上に、優美さが一段とまさってお見えになり、姫君の方は、華やかで颯爽として、いつまでも見飽きることのない、あたりにもこぼれ散るばかりの魅力といったら、今から比類なくていらっしやるのだった。(注)

この部分を見ると、男君には上品・優美といった奥ゆかしい女性らしい美が、女君にははなやかでさっそうとしていることなどから男性らしい美が備わっていることがうかがえる。『とりかへばや』における男女の入れ替えが天狗の仕業であることが巻三で発覚するのだが、巻一で男君は女性的、女君は男性的であったから男君は姫君として女君は若君と呼ばれ育てられた

それが巻三までにおける異装の理由となっている。男君・女君の美がともに本来の性らしい美を持っていたら、異装が成り立たなくなるため、男君には女性らしい美を、女君には男性らしい美を最初に美を表現するうえであてはめたのだらうと考えられよう。

ところが巻三において、男君と女君はともに本来の姿に戻る。しかし、前述したように美的表現の変化はない。これは、話を展開させるうえで最初に表現したであろう男君・女君の美を、一貫して作者が使用していることをしめしているのである。それはその美が揺るぐことのない確立されたもの、つまり男君女君その人となりの美であることがうかがえる。そのことからこれらの表現は、男らしさ女らしさを表すためではなく、男君・女君の本来の美として異装をやめても使用されたと言えるであらう。

## 三

次に、女君の美を表現するために使用されている「はなばな」とについて、注目してみたい。表①の「はなばな」との使用回数をみると総数が16あり、そのうち15が男装の女君に、残り

の1例が吉野宮の中君に使用されている。このことから、「はなばなと」が男装の女君の美を表す表現の代表語彙といつてもいいだろう。そこで、物語中に使用されている「はなばなと」その16例全てを抜き出して女君の美をみていきたい(本文には分かりやすいように番号をつけた)。

1 (巻一) 姫君は、はなばなと誇りに、見ても飽く世なく、あたりにもこぼれちる愛敬など、今より似るものなくものし給ひける。

2 (巻一) 中納言は、はなばなと、見れども見れども飽くまじうにははしく、こぼるばかりの愛敬似るものなきに、もてなし・ありさまも、さはいへど、なごやかにたをたと、いとなつかしきほどの、人にこよなくすぐれて目もあやなるを・・・

3 (巻一) 中納言、紫の織物の指貫、紅の色深く、つやこぼるばかりなるを出だして、あざやかにつゐる給へるかたちの、常よりもはなばなと、あたりにこぼるる愛敬、見まほしくなつかしげなる事いとたぐひなきを・・・

4 (巻一) はなばなとにほひ満ちたる御顔に、涙を浮け給へる

まみのけしき、いみじうあはれなり。

5 (巻一) 浮線綾の、所々秋の草をつくして縫ひたる指貫に、屋花色の象嵌の襖に、紅の打ちたる脱ぎかけて、光を放ち、はなばなとめでたく、ただ今極楽の迎へありて雲の輿寄せたりとも、なほどどまりて見まほしき御ありさまなり。

6 (巻一) 日ごろのほどに、かたちは今すこしにはひまさりにける心地して、はなばなと愛敬はあたりにこぼるるやうにて・・・

7 (巻一) かれはあてになまめかしう心にくきけしまさり、これははなばなと今めきて、こぼるばかりの愛敬ぞすすみ給ふらんと・・・

8 (巻一) 中納言の、紅の生絹の袴に白き生絹の単衣着て、うちとけたるかたちの、暑きにいとど色にはひまさりて、常よりもはなばなとめでたきを・・・

9 (巻一) 紅に薄色の唐綾重ねて、ながめ出でたる夕映、常よ

りもくまなくはなばなと見えて、つらづゑつきたる腕つきな  
ども、物を磨きたるやうにて・・・

10 (巻二) はなばなと愛敬づき、うつくしげなるかたちの、つ  
ゆの迷ひありても思ふべくもあらぬに・・・

11 (巻三) 督の君は、大将のはなばなとにほひ限りなきかた  
ちの、いたく面やせたるしも、いとどうつくしうらうたげなる  
に、おほやけしくもてすくよけたるほどこそををしくも見え  
けれ、かように思ひしめり届け給へるは、たをたとあはれ  
になつかしく見ゆるを・・・

12 (巻三) いとありつき、女さまになり果てて、はなばなと  
うつくしく、にほひやかなる見所、今すこしまさりて・・・

13 (巻三) いと惱ましげにて眺め出でて臥したる色あひ、はな  
ばなと光るやうににほひて、額髪のごばれかかりたるなど、  
絵に描きたるやうにていとみじく愛敬づき、うつくしきか  
たちの見まほしきが・・・

14 (巻三) 顔のうち赤み給へるが、はなばなとうつくしげに見  
るかひありと・・・

15 (巻三) いたく面やせ給へりしが、このころなほり給へるま  
まに、いとどはなばなとにほひを散らしたるさまして、御髪  
もつやつやと、かげうつるやうにかかりて・・・

16 (巻四) 二十にもあまり給はぬほどの、若くうつくしげに、  
飽かぬ事なくとのひ果てて、はなばなと愛敬づき見まほし  
きさまなど、「たぐひなしと見し人にいづくかは劣り給へる」  
と見るも、すこしもの思ひなぐさむ心地してうれしかりけり。

一番から15番までが男装の女君、巻四の16番が中君に使用さ  
れている本文である。1は前述したように、作者が最初に女君  
の美を表現したところであり、ここで、女君の美を確立したと  
考察した。そのことが、この一番から16番の本文からも推察で  
きうると思う。

一番から15番までの場面では、女君は男装しており、本来の  
女姿に戻っての「はなばなと」が使用されている場面は12番以  
降である。特に、12番は「女さまになり果てて」と、見た目が

もうすっかり女性であることをかいたうえて、その後その美を表現している。その美をみると、男装時の美よりも「今すこしまさりて」と男装時よりも美は増しているとしている。しかし、「はなばなと」「うつくし」「にはひやかなり」といった男装時に主に使用されていた美的語彙自体が変わることはなく、女姿になっても女君の美が変化していないことがうかがえる。

また、3・8・9番をみると「常よりもはなばなと」と普段の美しさよりもよりはなやかであるとしている。これは、女君の「はなばなと」美を前提としたものであるとうかがえよう。また、1番の「あたりにもこぼれちる愛敬」を前提とした表現が、2・3・6・7・10・13番に見られることから、1番で作者が女君の美を決定づけたことがうかがえる。

女君以外、唯一「はなばなと」が使われているのが前述したように吉野宮の娘である中君であるが、16番は、男君・女君が互いの立場に入れ替わり本来の性に戻ったことを知らず、女君への恋しさを募らせていた権中納言が、中君にその女君の備わっている「はなばなと」美を見、その恋しい思いをすこし解消する場面である。もし、中君が女君に備わっている「はなばなと」美を持っていなかったら、権中納言が女君への恋しい思いを少しでも解消することはできなかったかも知れない。そう考える

と、作者は作爲的に「はなばなと」を中君に使用したのではないだろうか。

このように、「はなばなと」の本文の使用場面を見ると「はなばなと」が女君に備わる美しさの代表的なものであることがより鮮明に見いだせると言えるだろう。

また、「はなばなと」とともに「にはひ」「にはひやか」が使用されていると言える。表①でも、「にはひ」「にはひやか」が女君に使用回数が多い美的語彙であることがみいだせる。そして、あたりにこぼれるような美の意味合いの本文があり、「はなばなと」の意味は人目にたつ美しさである。これらは、女君が周りの人々を注目させるほどの美しさを備えていることをしめすだろう。その美は、奥ゆかしい艶やかな「なまめかし」美の女装の男君とは、反対の前に出る印象をうける。そして、巻に注目すると「はなばなと」が女君に使用されているのは第三までである。これは、巻四における女君の登場が減ったということもあるが、なにより女装の男君の立場にかわり、男装時よりも人目にたつことがなくなっただけかも知れない。これらのことから「はなばなと」を備えていることが男装への要因となつたといえるだろう。



#### 四

次に、「とりかへばや」での「はなばなと」の使用回数は16であったが、他作品ではどのくらい「はなばなと」が使用されているのか、考察してみたい。

『とりかへばや』の中で、男装の女君は出産をひかえ宇治へとももる。この宇治という地名がでてくることは『源氏物語』の影響を受けていることをしめすだろうと言われている。そのほかにも『源氏物語』の影響を受けているだろう箇所が「とりかへばや」には多くある。そこで、『源氏物語』における「はなばなと」の使用回数を調べてみた。多種多様に美的語彙が使用されている物語にもかかわらず、たった2例しかなかった。次にその2例を記す。

・新しう造りたまへる殿を、宮たちの御裳着の日、磨きしつらはれたり、はなばなとものしたまふ殿のやうにて、何事もいままめかしうもてましたまへり。(花宴)

(訳) 新しくお造りになった御殿を、それは姫宮がたの御裳着の日に、みがきたててお飾りになられたのだが、すべて派手好みでいらっしやる右大臣の家風なので、万事にわたって当世風にしつらえておられる。

・昼寝の君、風のいと荒きにおどろかさされて起き上がりたまへり。山吹、薄色などはなやかなる色あひに、御顔はことさらに染めにほはしたらむやうに、いとをかしくはなばなとして、いささかも思ふべきさまもしたまへらず。(総角)

(訳) 昼寝をしておられた妹君は、風の荒々しい音に目覚めて起き上がりた。山吹や薄紫色などのはなやかな色合いのお召物で、御顔はわざわざ染めにおわしたかのように、まことに美しくあてやかで、物思いなどまるでなさそうな御面持でいらっしやる。

この二つの本文をみると、花宴巻での「はなばなと」が人物の美を表現しておらず、右大臣家の家風の性質を表現していることがうかがえる。従って、『源氏物語』における「はなばなと」の美的語彙としての使用例は総角巻での宇治の大君の妹君である中君につかわれたもの1例のみであるといえよう。そこから、多種多様に美的語彙が使用されている『源氏物語』において、「はなばなと」が重要視されていない美的語彙であることが考えられ、『源氏物語』の影響を受けているだろう「とりかへばや」における「はなばなと」の使用が特徴的なものであることがみいだせると言えるだろう。

また、「とりかへばや」は、『浜松中納言物語』『狭衣物語』

『夜の寢覚』の影響もうけていると「われている。そこで、『源氏物語』と同様にそれらの作品における「はなばなど」の使用回数を調べた。

まず『浜松中納言物語』における「はなばなど」の使用は、みいだせなかった。

『狭衣物語』では4例存した。次に本文を記す。

①限なき日の気色に、はなばなど匂ひ満ち給へる御顔を、見合せてたてまつりて、まばゆげに思して……(巻一)

②にはかに、あらぬ所に渡りて、ありつかず、はなばなどもてかしづかれ給ふ有様の……(巻二)

③うちもてなし給へる様の、気高う恥しげに、御顔の細やかに美しうて、らうらうじう愛敬づき給へる気色は、あたりにこぼる、心地して、はなばなど光る心地し給へるに、いとばかり思ふ事繫き宮の中の人々も、暗るゝ心地(ぞ)しぬる。

(巻一)

④紅のきぬ、あまたが上、櫻の固文なる着給へるかたち、はなばなど清げに……(巻二)

①④を見ると②は洞院の上の邸の暮らしぶりがきらびやかであることをいっており、ここでの「はなばなど」の使用は人物の美を表現するものではないだろう。ということとは、『狭衣物語』では人物の美を表現する「はなばなど」の使用回数は3例といえよう。②以外の対象人物はというと、①は源氏宮、③

は狭衣、④は洞院の上である。ここから、『狭衣物語』では「はなばなど」の対象人物の統一性がないことがうかがえる。また、物語の主人公狭衣など、主要人物に使用されているのも

うかがえる。そして、性別においては、男1女2である。次に『夜の寢覚』を調べると、5例存する。次に記す。

①姫君の、床よりおりて、ひきつくるふともなくうちとけて、御衣ばかり奉りかへたる、紅梅の八ばかり、明黄の小桂、袖

口・裾のつままで、たをたをとなまめかしく着なし給て、はなばなどにほひみちたりし御かたちの……(巻一)

②大納言の御方に参り給へれば、女房・童、はなばなど化粧して……(巻一)

③うちと、気色はなばなどとして、女房など、心よげに参りつど

ひて侍ふありさま、さらにもいはず、いとあらまほしげなる  
に……(巻二)

④うち笑みつゝ問ひきこえ給へば、はづかしと思して、御顔いとあかくなり給へる、いとほなばなど、うつくしげなり……(巻二)

⑤「よろしく、なりあはぬ御さまを見つけたらんにてだに、うち見むあはれの、おろかなべきにもあらぬを、ほなばなど句はしき御かたちは……(巻五)

①⑤をみると、③の「ほなばなど」が部屋の内外の様子を表しており、人物の美的表現語彙として使用されていないことが分かる。③以外の「ほなばなど」の対象人物は①が中君(寢覚の上)、②が女房・童たち、④・⑤が中君の義兄である中納言と中君の子である姫君(石山の姫君)に使用されている。中君、中君の子である姫君に使用されていることから、『夜の寢覚』では『狭衣物語』で見られなかった「ほなばなど」の対象人物の統一性がみられる。また、性別においては、男(②における童)女(④である。

このように、他作品での「ほなばなど」の使用回数をみると、『とりかへばや』における「ほなばなど」の使用回数、他に抜きんでて多い事がうかがえられる。このことは、大きな特徴であるだろう。しかし、「ほなばなど」は性別の面から言えば、『源氏物語』『狭衣物語』『夜の寢覚』の、どの作品もほぼ女性に使用されていることが知られ、『とりかへばや』14番が『夜の寢覚』の④番の表現に似ていることもうかがえられるので、影響を全く受けていないとは言えるだろう。

## 結論

これまでのことから、兄妹が本来の姿から異装し、また本来の姿に戻る『とりかへばや』において、その二人の美を表す美的語彙は何らかの変化もなく一貫して物語で使用されていたことが分かった。これは、つまり、作者が男装、女装に関係なく二人の美を確立し、その確立した美の表現を物語で一貫として使用していたということである。

また、美的語彙の使用回数の多さから女君が主人公であろうと見いだせた。そして、女君が備え持つ美「ほなばなど」が、影響を受けているだろう作品と比べ、その表現方法は似ている

ものの、使用回数が抜きんでて多い点で大きな特徴であること、女君が男装するうえで重要な美を表す形容であることが分かった。加えてこの「はなばな」とは、女君以外には吉野宮の中君だけ使われており、権中納言が心引かれる理由付けとなる。何よりも美を表す表現に、男装女装、そして本来の姿に何らかの変化がなかったことは予想を裏切るものであったが逆に、作者が兄妹を本来の性で捉えていることを確認することができた。

〔注一〕友久武文・西本寮子『とりかへばや』一九九八年六月 笠間書院。

〔注二〕梅野きみ子『王朝の美的語彙 えんとその周辺』続 平成七年六月 新典社。

〔注三〕〔注一〕を基に作製。

〔注四〕

〔注五〕本文引用は〔注三〕。以下同じ。

〔注六〕池田亀鑑『源氏物語大成 第八冊 索引篇』。

〔注七〕阿部秋生・秋山 虔・今井源衛・鈴木日出男『源氏物語一六』一九九四年三月 小学館。

〔注八〕池田利夫『浜松中納言物語総索引』昭和三十九年六月

武蔵野書院。

〔注九〕塚原鉄雄・秋本守英・神尾暢子『狭衣物語語彙索引』

昭和五〇年十二月 笠間書院。

〔注一〇〕三谷栄一・関根慶子『狭衣物語』昭和四〇年八月

岩波書店。

〔注十一〕阪倉篤義・高村元継・志水富夫『夜の寝覚総索引』

昭和四九年九月 明治書院。

〔注十二〕阪倉篤義『夜の寝覚』昭和三十九年十二月 岩波書店。